

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品」

常木 麻衣

氏名 常木 麻衣
学位の種類 博士(学術)
報告番号 甲第55号
学位授与年月日 令和元年9月15日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 「アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品」
(Bronze Objects and Trade in Tin and Copper in the Assyrian Colony Period)
論文審査委員 (主査) 教授 小口 裕通
(副査) 教授 小口 和美
(副査) 教授 紺谷 亮一 (ノートルダム清心女子大学教授)

博士論文の要旨

題目 「アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品」

(Bronze Objects and Trade in Tin and Copper in the Assyrian Colony Period)

氏名 常木 麻衣

アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品
Bronze Objects and Trade in Tin and Copper in the Assyrian Colony Period
要旨

13-DI002 常木麻衣

前 1930 年頃から前 1750 年頃にかけて、北メソポタミアの都市国家アッシュール(Aššur)の人々は、交易を推進するための居留地をアナトリアに幾つか設け、中央アナトリアの都市カニシュ(Kaniš)およびアナトリアの他の都市や町との交易を盛んに行っていた。アナトリア考古学・歴史学では、この時期をアッシリア・コロニー時代と称する。カニシュは、このアッシュールの対アナトリア交易の中心的役割を果たした居留地であり、現在のキュルテペ(Kültepe)がその都市の遺跡である。この交易に携わったアッシュールの人々は、言い換えれば、アッシリア商人といえることができる。

この交易は、アッシュールの人々が青銅(銅と錫の合金)の原料となる錫や織物などをアナトリアへ運び、銀、ときには金をその見返りに得るというものであった¹。このことは、キュルテペの居留地・カールム区域から数多く出土した楔形文字史料(以下、キュルテペ文書と称す)によって明らかになっている。

銅と錫という 2 つの金属からつくられる青銅が使用されるまでには金属発展の長い歴史がある。前 7200 年頃チャユヌ(Çayönü)で自然銅が使用された後、精錬遺構や関連遺物が見つかる前 5 千年頃から金属器の生産が本格的に始まる [佐々木 2002: 3-4]。さらに硬度・強度を増すため、ヒ素を混入したヒ素銅²がつけられ、またさらに、ヒ素銅よりも硬く強い、錫を混入した合金、「青銅」が発明されたのである。ヒ素銅から青銅への移行は「前期青銅器時代」に成し遂げられたと考えられている [Wilkinson 2014: 153]。そして、青銅が一般的に使用されていた時代が次の「中期青銅器時代」である。本稿の対象となるアッシリア・コロニー時代は、まさに中期青銅器時代のなかの一時期である。

1 金属鉱物資源を豊富に有するアナトリアで、当時、金や銀の採掘が行われていたことは確かな事実である [Yener, Geçkinli and Özbal 1996: 375]。また、当時のアナトリアには、銅を豊富に産出する鉱山が存在したことも確認されており [Dercksen 1996: 27-28]、現地採掘の銅に錫を加え鑄造した青銅製品が使用されていたことも、発掘調査を通じて確認されている。このように鉱物資源が豊富なアナトリアは、古来よりメソポタミアとの経済上の交流があった地域である。特にウルク後期(前 4 千年紀後半)におけるウルク文化のアナトリアへのめざましい波及、アッカド王朝時代のサルゴンとナラム・シンのアナトリア方面への遠征(前 3 千年紀後半の中頃)などは、アナトリアの鉱物資源を求めてのことであったと考えられる [Wilkinson 2014: 153]。

2 ヒ素銅は、鑄造時に有毒ガスが発生するなどの問題点を抱えていた。

一方、アッシリアが行なっていた取引を言及するにあたり、次の2つの課題を解決する必要がある。まずは、青銅の原料となる錫の当時の供給源について、まだ不明な点が多いということである。キュルテペ文書によれば、この取引の主要品目である錫がアッシュールからもたらされたものであったことは疑う余地のない事実であり、またそれは、アフガニスタンで産出されたものであることが通説であった。しかし2000年代初期の調査で、錫の鉱脈や鉱山が、タウルス山脈 [Yalçın 2003] や南コーカサス地域 [Parzinger 2002] で発見され、アナトリアでも錫が採掘されていた可能性がでてきたのである。その為、錫の鉱脈・鉱山がアナトリアにあったのにもかかわらず、なぜ、アッシュールから錫がアナトリアへもたらされたのかという単純な疑問が生じる。この点について、本稿では、錫の鉱脈・鉱山はあったとしても、この時代に錫の採掘が実際行われていたのかどうかは不明であり、キュルテペ文書にみられるように、青銅をつくるために必要な錫の供給は、アナトリアの当時の都市や町がアッシュールに依存していたとする見解をとっている [Postgate 1992: 212]。

次の問題は、アッシュールに対する、青銅の主原料である銅の供給源である。当然、アッシュールでも青銅をつくるための銅を必要としていたはずであるが、キュルテペ文書からは、アッシリア商人が中央アナトリア北西部のみで銅の取引に関与していたことが窺われるだけで³ [Larsen 1976: 91; Barjamovic 2011: 14]、アッシュールとアナトリアとの間の銅の取引についての言及は皆無である。この点について本稿では、考察を試み、新見解の提示を行った。それは、アッシュールが銅の取引先としての独自の地域とルートを中央アナトリア南東部に有していたということである。

本稿は、青銅製品の使用が一般化した、所謂アッシリア・コロニー時代において、アッシュールが行った対アナトリア取引の様子の詳細を、キュルテペ文書の研究者の論考を基盤として、検討をおこなった。次に独自の視点として、銅や錫の産地の同定を試み、それらの取引や、キュルテペ文書中の記述から、青銅製品の価格についての推定を行う。そして、アッシュールからアナトリア地方に至る当時の取引路上の都市や町で使われていた青銅製品を型式分類、比較することで見いだされる、都市や町の関連性を明らかにすることも目的としている。

それらのことを論じるため、論文の章立ては次のようになっている。

³ アナトリア内部の取引でアッシリア商人が関与したものは、銅以外に羊毛であった [Dercksen 2004: 183ff.; Veenhof and Eidem 2008: 87; Larsen 2015: 195]。それ以外にも、穀物、油、蠶、皮革、蜂蜜などがあったが [Orlin 1970: 58]、大麦や小麦などの穀物は、儲けだけを目的にする品というよりも、基本的には生活必需品であり [cf. Veenhof and Eidem 2008: 87-88]、他のものも生活に関係するものである。

第1章	はじめに
第2章	アッシリア商人
第3章	主要交易品とその価値
第4章	青銅製品の型式分類
第5章	交易路上にある遺跡とそこからの青銅製品
第6章	考察

まず第1章では、研究対象や研究目的、研究方法などを記載するなかで、青銅使用の利点を説明している。なお、この章で重要なのは、歴史的観点から2つの時期に分けられるアッシリア・コロニー時代の年代的枠組の設定を行ったことである。

第2章は、キュルテペ文書の研究者の論考から、当該交易のようすを明らかにする章である。従来の文書研究の多くを網羅して、できるかぎり詳細に描き出せるようにした。ここでは当該交易の交易路の推定を、従来から指摘されている2つのルート(アッシュールからティグリス川沿いに北上してニネヴェ付近で西進するルートとアッシュールからテル・アッファル平原を経てハブール盆地に入り西進するルート)に加えて、もうひとつのルートの存在の可能性を指摘した。これは、アッシュールからティグリス川沿いに北上、さらにティグリス川沿いにアナトリアに入ってエルガニ・マデン地区にいたるルートである。

第3章では、主要な交易品であり、さらに青銅器を鑄造する為の原料をなす銅と錫について、どこから供給されたのか、また、青銅製品はどこで製造されたのかといった点について、考察を試みた。錫については前述したとおり、アフガニスタンからもたらされたと結論づけたが、銅についてはアナトリアの人々とアッシリアの人々とは、交易の範囲の棲み分けが成されていたのではないかと指摘した。これは第2章で言及したエルガニ・マデン地区にいたるルートを利用して、アッシュールが独自にこれらの地区と銅交易をしていたという考察である。さらにこの章では、前2千年紀の青銅製品の価格と生産量を考察する為、古代の度量衡について新たな試みを行った。これらにより、既に文献史料から明らかになっている当時の錫と銅の取引量から、当時どれほどの青銅製品が作られていたのかを提示した。

第4章では、独自の分類方法を用い、青銅製品の形式分類を行った⁴。

⁴ 青銅製品の武器類の研究では、デシャエス [Deshayes 1960] やエルカナル [Erkanal 1977] の研究が、アナトリアの青銅製品の比較研究において基礎となる。また青銅

第 5 章では、アッシリア・コロニー時代における交易ルートに関連する遺跡の概要、及び該当する時期の層から出土した青銅製品の出土状況と、出土傾向について言及し、特に、一つの遺跡から多数出土した青銅製品の長さや幅がわかるものは、グラフ化することで、出土した青銅製品の傾向を考察した。

第 6 章では、前章までの研究内容を総合的に考察し、結論を導いた。まず出土した青銅製品を基準となるカールム・カニシュ第 II 層と第 Ib 層に分け、青銅製品の型式分類及び建築層ごとの分析を行った。またそれを踏まえて、同時期に同様のタイプの青銅製品が、交易路上の関連遺跡からどの程度出土しているのかを確認し、比較考察を試みた。さらに、墓・住居跡、宮殿趾といった出土場所による比較をおこない、どのような人々がどのタイプの青銅製品を使用していたのかといった、当時の生活の一部まで踏み込んで考察した。

これらの考察を踏まえ、本稿では、北メソポタミアの都市国家アッシュールの商人による対アナトリア交易の詳細な様子を明らかにし、さらに、キュルテペ文書中の銅や錫の取引記録を用い、銅や錫の供給源とそれらの交易についての考察を行った。また、独自の視点として、出土した青銅製品から当時の価格や価値を推定し、さらに、交易路上にある都市や町で使われていた青銅製品の比較により、それぞれの都市や町の関連性を明らかにした。青銅製品という観点からすれば、遠く離れた中央アナトリアと北メソポタミアの、交易路一帯は同じ流行域を形成していたことが確認された。このことは、青銅製品には欠かせない錫を必要とする都市や、町の密な関連性が窺われる。

一方、本稿で残された課題は、青銅製品の加工技術がどこから普及したのかといった技術的な問題である。これらを解明することで、青銅製品から鉄製品へどのように移行していったのかが、今後明らかになっていくであろう。

製品の短剣、槍先などの武器類の分類が行われており、これらは本稿においても重要な基準としている。ミュラー・カルペ [Müller-Karpe 1994] の研究は、上述した武器類に焦点を当てているものの、武器の製作に使用された鋳型に注目している。そして、対象地域は少し変わるが、シリア・パレスティナの武器の研究をフィリップ [Philip 1989] が行っており、これも分類基準を決める上で参考になった。更に、対象地域を広げた研究では、中近東全体の武器の研究をガーネス [Gernez 2007] が、中近東の金属の道具に関する包括的な研究をブラックウェル [Blackwell 2011] が行っている。これらの研究は、幅広い地域から出土した資料を比較検討しており、各器種の分布を考える上で非常に役に立つ。武器類以外の研究では、クライン [Klein 1992] がピンを包括的に研究しており、本稿のピンの分類で参考とした。

氏 名 常木 麻衣
学位の種類 博士(学術)
報告番号 甲第55号
学位授与年月日 令和元年9月15日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 「アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品」
(Bronze Objects and Trade in Tin and Copper in the Assyrian Colony Period)
論文審査委員 (主査)教授 小口 裕通
(副査)教授 小口 和美
(副査)教授 紺谷 亮一(ノートルダム清心女子大学教授)

博士論文審査結果の要旨

題 目 「アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品」

(Bronze Objects and Trade in Tin and Copper in the Assyrian Colony Period)

氏 名 常木 麻衣

2019年 7 月 17 日

博士学位請求論文の審査結果報告書

主任審査員 国土館大学大学院グローバルアジア研究科

小口 裕通

審査員 国土館大学大学院グローバルアジア研究科

小口 和美

審査員 ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科

紺谷 亮



1. 提出論文

「アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品」

Bronze Objects and Trade in Tin and Copper in the Assyrian Colony Period

(A4版 日本語30行組 本文編:127枚 [脚註、挿入図表] 図版編:図25枚、遺物一覧表33枚)

提出者: 常木 麻衣

資格検定: 2016年6月7日

事前審査: 2019年4月18日

提出日: 2019年4月25日

最終提出日: 2019年7月4日

口頭試問及び公聴会: 2019年7月13日

審査会: 2019年7月13日

2. 論文要旨

本博士学位請求論文(以下、本論文という)は、以下の構成からなる。

目次

本文挿入図表目録

第1章 はじめに

第2章 アッシリア商人

第3章 主要交易品とその価値

第4章 青銅製品の型式分類

第5章 交易路上にある遺跡とそこからの青銅製品

第6章 考察

参考文献

図版・表目録

図版(1~25)

本論文は、北メソポタミアのティグリス川西岸に位置する古代都市アッシュール (= 都市国家) に住む人々が、前 20 世紀の後半から前 18 世紀中頃にかけて行っていた錫と織物の対アナトリア交易のようすを明らかにし、その交易路上にある都市や町で使われていた青銅製品の形態的様相を総合的な観点から考察しようとしたものである。当時、青銅 (銅と錫の合金) をつくるために必要な錫を、アッシュールの人々 (アッカド語の古アッシリア方言を話す人々) はアフガニスタンから入手し、また、バビロニア (南メソポタミア) からは織物を輸入、それらをアナトリアへ再輸出、その見返りに銀 (時には金) を得るといふ、いわゆる「中継貿易」を行っていた。また、アッシュールの人々は、アナトリアに幾つかの居留地 (アッカド語でカールムあるいはワバルトゥムと呼ばれていた場所) を設け、それらの居留地に居住し、アナトリアの都市や町とのあいだの交易の円滑な推進をはかっていた。それらの居留地はアナトリアの都市や町に附属するかたちで点在し、そのなかで中心的な役割を果たしていたのが古代都市カネシュ (遺跡名キュルテペ) のカールム (居留地) であった。これらのことは、キュルテペ出土の、膨大な数に及ぶ楔形文字粘土板文書から知られる事実である。なお、このような交易が行われた時期を示すのに、アナトリア考古学では「アッシリア・コロニー時代」という歴史学的区分による時代名が慣用される (“colony” [植民地] という用語をそこで使うのは実際には不適切、“settlement” [居留地] が妥当)。それは、いわゆる「中期青銅器時代」のなかにはいる時期である。筆者はさらに青銅の主要成分である銅の交易についても、筆者自身の独自の視点から追求し、従来描き出されることがなかった、銅交易についてのアッシュール側における映像を、新たな見解とともに提供するに至っている。それは、特筆に価する研究の成果であるといえよう。

筆者は 2009 年に「中央アナトリアにおけるアッシリア商人居留地時代の青銅製品について - カマン・カレホユック第 IIIc 層焼土層出土の鎌・短剣・槍先を中心として -」と題する修士論文を本研究科に提出し修士号を取得、次いで 2011 年、英国ダラム大学 (Durham University) へ留学して、近東考古学分野における青銅製品の、英国で唯一の専門家であるグラハム・フィリップ教授 (Professor Dr. Graham Philip) の指導のもと、*Metalwork from Central Anatolia in the Assyrian Colony Period: A Review in the Light of Finds from the Level IIIc Destruction at Kaman-Kalehöyük* を執筆し、M.A. の学位を得ている。本論文は、当時の交易のようすや歴史考古学上の問題点を詳説することに加え、研究対象の地域をアナトリアから北メソポタミアにまで広げて青銅製品を考察、これら二つの修士論文の内容を一層発展させたものになっている。

以下において、提出された学位請求論文の内容を、その構成にそって要約する。

第 1 章は、本論文の導入部分として、研究対象や研究目的、研究方法を記載する章である。そのなかで目を引くのは、銅の使用、ヒ素銅の使用、青銅の使用へとメソポタミアやアナトリアでの金属の使用が移行するなかで、融点温度や溶融時の粘着性、そして硬度および強度という観点から、青銅使用の利点 (青銅が好まれた理由) について論じているところである。また、そのなかで最も重要なところは、研究対象とする時期の年代的枠組の設定である。その枠組に従って、後続する各章での論の展開がなされていくことになるので、本論文の基盤となる部分である。研究対象とする時期は、歴史学的な観点から二つのフェーズに分けられる。筆者は、それぞれを、「カールム・カニシュ第 II 層の時期」、そして「カールム・カニシュ第 Ib 層の時期」と称してい

る。すなわち、「カールム・カニシュ第Ⅱ層の時期」とは、キュルテペ（古代名カニシュ）におけるアッシュールの人々の居留地（カールム）区域の第Ⅱ層に相当する時期のことであり、アッシリア・コロニー時代第1期ともいえる。他方、「カールム・カニシュ第Ⅰb層の時期」とは、同遺跡のアッシュールの人々の居留地（カールム）区域の第Ⅰb層に相当する時期のことであり、アッシリア・コロニー時代第2期ということができる。前者が下層で古く、後者が上層で新しい。筆者は、年代推定するための既存の証拠から、「カールム・カニシュ第Ⅱ層の時期」を前1930年頃～前1824年頃、他方、「カールム・カニシュ第Ⅰb層の時期」を前1813年頃～前1750年頃に置いている。これは、アッシリアの王名表の39番目にその名が記されるシャムシ・アダド1世の治世年代を前1813年～前1781年とする「中年代説 (the middle chronology)」に基づく年代算定である（「高年代説 (the high chronology)」ではその王の治世第1年は前1869年、「低年代説 (the low chronology)」では前1749年となる）。

第2章では、楔形文字文書の解読研究者の論考を基盤にして、アッシリア・コロニー時代の当該交易の様相を明らかにしている。当時の交易の様相を表す史料（アッカド語の古アッシリア方言で書かれた粘土板文書）の多くは、アッシュール（北メソポタミア）から遠隔の地の中央アナトリアにあるキュルテペ・カニシュから出土したものであり、商業取引関係の文書がその主体をなす。アッシュールの人々は家族経営の商いを行っており、家長はアッシュールに在住、家族の一員を居留地に住ませ、錫と織物の売買に従事させていたことがわかっている。筆者は、史料に散見される居留地のある都市や町の名についての先行研究を利用して、「カールム・カニシュ第Ⅱ層の時期」、「カールム・カニシュ第Ⅰb層の時期」それぞれの居留地のある都市や町の名前を整理して掲げている。交易品（錫と織物）は、運搬手段としてロバを使う隊商により、まずアッシュールからカニシュ（現キュルテペ）の居留地へと運ばれ、必要に応じて、そこから他の居留地に分配されて売買された。この交易は、アッシュールの人々が家族単位で自由に行っていたわけではなく、アッシュールにある政府直属の商館（商業管理機関）による管理や、カニシュの居留地にある現地の出先商館による管理を受けていた。商売を行うアッシュールの人々は、それらの商業管理機関に税を払っていた。税は居留地のある都市や町の支配者にも払われ、また交易品を運ぶ隊商は交易路上の都市や町の支配者に対して通行税を払っていた。それらの税の支払には錫が使われていた。そのような税関係の大きな負担があったにもかかわらず、そのような交易が推進され続けたのは、交易から得られる利益がかなり大きかったことを物語っていると、筆者はそこで結んでいる。

この章で最も重要なのが、この交易にかかわる交易路の推定である。ここで推定した交易路上にある都市や町の遺跡から出土した青銅製品が本論文の研究対象になるからである。「カールム・カニシュ第Ⅱ層の時期」と「カールム・カニシュ第Ⅰb層の時期」の主要交易路が同じであるという前提においてここでの議論が行われる。ひとつは粘土板文書として残る旅程記録から知られるもので、アッシュールからティグリス川沿いに北上して、ニネヴェ付近で西進、ハブール盆地を横断してバリーフ川上流域に達する、いわゆる天水農耕地帯を通るルートである。もうひとつは、搬入品という観点からの考古学的な証拠を通して明らかとなるルートで、アッシュールからテル・アッファル平原を経て、シンジャール山地を横断、ハブール盆地に至る、古来より使われ続けたルートである。それに、筆者は、アナトリアの銅の産地であるエルガニ・マデン地区

からティグリス川沿いにアッシュールに向かうルートを加えている。これは、アッシュールへの銅の輸送という可能性を論じるうえで重要なルートの想定となるであろう。

第3章は、当該交易の主要品目である錫と織物の論議に、青銅の主成分である銅についての論究が行われる章である。そして、内容は、当時の度量衡という観点から、交易品の価格への論議へと発展・移行する。

まず、筆者はそれらの主要品目のひとつである織物がバビロニア産の高品質の毛織物とアッシュール産の一般的な毛織物から構成されていたことに言及し、次に、もうひとつの主要品目である錫について、その供給源の問題について議論している。1980年代後半以前においては、錫の鉱床は豊富な鉱物資源を有するアナトリアにはないものと見做されていたが、1987年に当地における錫の鉱床の存在が確認されたことが報じられるに至り、それはアナトリア考古学界に大きな論議を引き起こすことになった。アッシュールから錫が運ばれてきたことはキュルテペ出土文書によって明らかな事実である。この問題に対して、筆者は、次のような妥当な指摘をしている。

「いずれにせよ、アナトリアの人々は、現地の錫鉱床を採掘し錫を入手するよりも、アッシュール商人から錫を購入することを好んだのである。限られた錫鉱床が採掘されたとしても、銅と違って、需要を満たすだけの供給量の産出ができなかったのかもしれないし、そうだとしたならば、そのような需要と供給の関係からいっても、アナトリアで産出された錫は、アッシュール商人がもたらす錫よりも、さらにより高価なものになったにちがいない。」

アフガニスタンには、酸化スズの鉱物である「錫石 (cassiterite)」の鉱床と、広範囲にわたる錫の「漂砂鉱床」が存在する。それらの鉱床の錫の含有率は5~6%である。他方、アナトリアの鉱床では、その含有率は1.5%だといわれる。この事実も、筆者の指摘を裏付けている。さらにこの問題に加え、筆者は、アフガニスタンからもたらされた錫のアッシュールまでのルートについて3説があることを指摘し、それら説の紹介をしている。ひとつは歴史学者の説で、東方からザグロス山脈の都市スーサ経由でバビロニアに入った錫がアッシュールにもたらされたとするものである。もうひとつも、歴史学者の説で、ティグリス川の支流であるディヤラ川の下流域(エシュヌナ王国があった場所)に東方からもたらされた錫の集積地があり、アッシュールの人々はそこから錫を入手していたとする説である。さらにもうひとつは、彩文土器の分布に着目する考古学者の提唱する説で、イランのウルミア湖の南岸に、アフガニスタンからの「錫の道」が通っていたとするものである。

錫の問題に加えて重要なのが銅の交易の問題である。キュルテペ出土文書には、アナトリアからアッシュールへ銅が運ばれたという記述は全くみられないが、その文書からは、アナトリアの人々がアナトリア内部で銅の交易を行い、それにアッシュールの人々もある程度関与していたことが窺われる。銅はアッシュールの人々にとっても必要な金属であったはずである。歴史学者のなかには、アッシュールの人々はティグリス川の源流近くの、アナトリアの銅の産地エルガニ・マデン地区から直接、アッシュールに銅をもってきたにちがいないと指摘する人もいるが、これも当該交易にかかわる未決問題のひとつとなっていた。この問題に対して、筆者は新たな見解を提示するに至っている。それは、カネシュを中心とするアナトリアの人々の銅交易の範囲(黒海南岸のポントス山脈の南側の銅鉱山を中心とする交易範囲)と、それに対するアッシュールの人々の銅交易の範囲(ティグリス川の源流近くの銅の産地エルガニ・マデン地区を中心とする交易の

範囲) は区別できる可能性があるという見解である。とすれば、ティグリス川沿いにアッシュールに向かうルートの使用が後者の交易範囲と結びつくことになる。非常に興味深い見解である。

この章の内容は重厚であり、最後に青銅製品の価格についての推測を、筆者独自の視点から行っている。当時の度量衡の重さの単位は、大きな単位からタレント(talent [biltu]), ミナ(mina [minu]), シェケル(shekel [šiqu])というものがあり、また極小単位としてシェ (she [še])というものがあつた。そして、1 talent=60 mina、1 mina=60 shekel、1 shekel=180 she であり、つまり、六十進法が用いられている。1 シェは大麥一粒をさし、1 シェケルは180粒の大麥の重さに相当し、そして、1 シェケルのグラム重は約8.33gと考えられている。このことを基盤にして、キュルテペ出土文書から知られる銅や錫の価格(銀へ換算、銅1g=銀0.002 シェケル、錫1g=銀0.028 シェケル)から、青銅をつくるにあたって強度と硬度において最適な銅と錫の混合比率が9:1であることを前提に出土した青銅製品の価格(銀...シェケル)を推測している。筆者がそこで掲げる計算式は次のようなものである。

実物の青銅製品の重さ(g)= 銅の重さ Xg(90%)+ 錫の重さ Yg(10%)

銅の重さ Xg= 実際の青銅製品の重さ x 0.9 錫の重さ Yg= 実際の青銅製品の重さ x 0.1

$Xg \times 0.002 + Yg \times 0.028 = \text{銀 } Z \text{ shekel [青銅製品の価格]}$

第4章は、青銅製品の型式分類方法を提示する章である。この分類により、青銅製品の時間的あるいは空間的な考古学上の考察が可能となる。この分類自体は筆者独自のものであるが、英国ダラム大学のグラハム・フィリップ教授から既に太鼓判を捺されている分類内容である。大きな分類項目としては、(1) 短剣、(2) 槍先、(3) 斧、(4) ハンマー斧、(5) 鎌、(6) 二又の武器、(7) ナイフ、(8) 鎌、(9) 錐、(10) 鑿 [のみ]、(11) ピン、(12) 針、(13) リング、(14) スタンプ、(15) ピンセット、(16) 容器、(17) 糸巻き の17項目があり、それらに「鑄型」の資料が加えられるという章の構成になっている。(1) 短剣はタイプ1a、1b、1c、2、3と5つのタイプに、(2) 槍先はタイプ1a、1b、2、3の4つのタイプに、(3) 斧はタイプ1、2a、2b、3の4つのタイプに、(4) ハンマー斧と(5) 鎌はそれぞれ1タイプのみとして、また、(6) 二又の武器はタイプ1、2の2つのタイプに、(7) ナイフや(8) 鎌、(9) 錐、(10) 鑿等はそれぞれ1タイプ、(11) ピンはタイプ1、2、3、4、5、6、7、8、9、10の10タイプに、(12) 針は1タイプのみ、(13) リングはタイプ1、2の2つのタイプ、(14) スタンプと(15) ピンセット、(16) 容器、(17) 糸巻き等はそれぞれ1タイプのみとして分類されている。

第5章では、第4章の型式分類を基盤にして、筆者が指摘するところの交易路に沿った都市や町の遺跡の当該時期の層から、どのようなタイプの青銅製品が出土しているかを提示する章である。そして、青銅製品タイプの表示は、先述した2つのフェーズごとに行われる。ここで、取り扱われる遺跡は、当該時期にあたる青銅製品の出土が報告されている遺跡で、中央アナトリアの諸遺跡、キュルテペ (Kültepe - Kaniš)、カマン・カレホユック (Kaman-Kalehöyük)、ヤッサホユック (Yassihöyük)、アリシャール・ホユック (Alişar Hüyük - Amkuwa)、ボアズキョイ (Boğazköy - Hattuş)、アジェム・ホユック (Acemhöyük - Puruşanda / Ulama)、南東アナトリアの諸遺跡、リダル・ホユック (Lidar Höyük)、ヒルベメルドゥン・テペ (Hirbemerdon Tepe)、ウチテペ (Üçtepe)、北東シリアから北イラク、すなわち北メソポタミアの諸遺跡、テル・アルビド (Tell Arbid)、テル・

バリ (Tell Barri - Kahat)、シャガル [チャガル]・バザール (Chagar Bazar - Ašnakkum)、アッシュール (Aššur) などの 13 遺跡である。

第 6 章は、第 5 章で掲げた遺跡でどのようなタイプの青銅製品が出土したかを幾つかの表にしてまとめあげ、それらの表を基に考察を行う章である。表 6.1 は「カールム・カニシュ第 II 層の時期」の青銅製品や鋳型、関連遺物が建物跡あるいは工房跡、墓のいずれから出土しているかを示す表である。この時期に相当する資料が他の遺跡からほとんど得られないということが実は問題であり、それがアッシリア・コロニー時代第 1 期 (前 1930 年頃～前 1824 年頃) の青銅製品にかかわる議論の十分な展開を妨げる主要因となっている。他方、「カールム・カニシュ第 Ib 層の時期」すなわちアッシリア・コロニー時代第 2 期 (前 1813 年頃～前 1750 年頃) の場合には、ある程度、各遺跡からの比較資料が得られ、それらのデータをもとに考察することを可能ならしめている。表は「カールム・カニシュ第 Ib 層の時期」の遺跡の主丘の建物跡 (や破壊層) [表 6.2 と表 6.3]、主丘の宮殿址 [表 6.4]、主丘の墓 [表 6.5]、主丘の周辺にあるカールムあるいはワバルトゥム地区の建物跡や工房跡 [表 6.6]、墓 [表 6.7] からの青銅製品 (タイプ別) や鋳型、関連遺物から構成されている。これらの表により、当該時期の、青銅製品という観点からの、交易路上にある都市や町の関連性が見いだされる。それらの都市や町の青銅鋳造職人はアッシュールの人々から錫を入手し、同じ型式の青銅製品を製作していたのである。

3. 審査結果

本論文は、所謂「アッシリア・コロニー時代」(前 1930 年頃～前 1750 年頃) の交易の様相を明らかにするために、大きく 2 つの側面、すなわち歴史学的側面と考古学的側面の両面からアプローチを試みたものである。歴史学的側面からのアプローチでは、楔形文字文書の解読研究者の数多くの研究書や論考から得られる情報を妥当性の可否を考慮しながら整理して、当時の交易の様子をさまざまな角度からできる限り正確に描くことを試みている。考古学的側面のアプローチでは、アナトリアの鉱山から産出される銅と当該交易の主要交易品である錫からつくられた青銅の種々様々な製品について、交易路上にある都市や町の遺跡から出土した資料をもとに、どのようなタイプのものがどのように分布するのかをみて、青銅製品を通じて看取できる都市や町の関連性を明らかにしようとしている。このような両側面からのアプローチは、たとえ考古学の分野であっても、歴史時代を取り扱ううえで妥当な方法である。

本論文の導入部分の基盤ともいえる、研究対象とする時期の年代的枠組の設定 (第 1 章) においては、絶対年代を既存の証拠を駆使して論理的に推定している。それは、未だ類例のない説明となっており正に圧巻である。

また、第 2 章で描かれる当該交易の様相はかなり詳細でよく纏まっており、楔形文字文書の研究者が描きだすものを凌いでいるところが多くみられる。一方、当時の交易路の推定にあたっては、北東シリアのハブール盆地を横断するという従来の説に、アナトリアにおけるティグリス川最上流域に沿うルートを加えている。そのルートは、アナトリアの銅の一産地であるエルガニ・マデン地区と関連づけることができ、それは新しい説の提唱 (第 3 章) へと繋がる。

第 3 章における、(1) 交易の主要品目である錫の供給源に係わる問題の議論と、(2) 青銅の主成

分である銅自体の交易に係わる議論は、特筆に値する。

(1) アナトリアにおける錫の鉱床の近年における発見と、アッシュールの人々が東方から入手した錫をアナトリアで売るために運んできたというキュルテペ文書にみられる事実は、アナトリアに錫の鉱床があるにもかかわらず、なぜ、アッシュールから錫がもたらされ売られたのか、というシンプルな疑問に我々を導くが、この点に関しては、上記第3章の内容の要約のところで記したように、妥当な指摘が与えられる。それは評価されるべき点である。

(2) キュルテペ文書には、銅の鉱床を豊富に有するアナトリアから、アッシュールへ銅がもたらされたという記述がみられない。それは、アッシュールでは青銅をつくるための銅は必要なかったのか、というこれもシンプルな疑問に我々を導く。その問題に対しては、新説の提唱が行われる。その新説では、カネシュ (キュルテペ) を中心とするアナトリアの人々の銅交易の範囲 (黒海南岸のポントス山脈の銅鉱山から採掘された銅が交易の対象)と、アッシュールの人々の銅交易の範囲 (ティグリス川の源流近くのエルガニ・マデン地区の銅鉱山から採掘された銅が交易の対象)とが区別できる可能性が示唆される。

第3章では、さらに、遺跡から出土した青銅製品の実物の重さから、その青銅製品の、銀で表される当時の価格 (銀 ... シェケル) の推定を行い、新しい知見を提示している。これも評価されるべき点である。

第4章から第6章にかけては、当時の交易路上にあった都市や町の遺跡から出土した青銅製品をタイプ別に分け議論が展開される。ただ、青銅製品という遺物は出土量が限られるため、考察を進めるうえでの十分な資料が得られるに至っていないという、研究を進めるうえでの障壁がそこにあることは否めない。とはいえ、どのようなタイプの青銅製品が当時の交易路上にどのように分布し使われていたかという点では、これらの章から何かしらの示唆を受けることができる。惜しまれるのは、第1章から第3章にかけて議論される文書から知られる、言い換えれば、歴史学上の既知事実と、考古遺物として発見された青銅製品との関連性が論究されるまでに至っていないことである。それは、今後の課題となるであろう。

以上、審査員一同の責任において、国士舘大学大学院学則第 51 条に基づき慎重に審査した結果、本学位請求論文が学術博士学位授与に値するものと判定する。